

## 2017 年度 生涯発達心理学 第 2 回授業のまとめ（解答）

|       |  |      |     |  |     |       |
|-------|--|------|-----|--|-----|-------|
| ク ラ ス |  | 学籍番号 |     |  |     |       |
| 氏 名   |  |      | 講義日 |  | 講義回 | 第 2 回 |

生涯発達心理学の理論

生涯発達心理学を支える代表的な理論として、ピアジェの認知発達理論や比較行動学や比較発達心理学の理論がある。さらにワトソンやスキナーに代表される（ ①学習理論 ）も発達心理学を支える代表的なものである。

パブロフは古典的条件づけ（レスポナデント条件づけ）を見出し、条件刺激と無条件刺激を対提示することにより、条件刺激が（ ②無条件反応 ）を導き、条件反応となるプロセスについて説明した。

課題場面の問題解決に至るのに（ ③試行錯誤 ）の過程を経ずにそれまでの行動とは不連続に解決行動に至ることを洞察による学習という。これは洞察による場の再体制化がなされた。

人間の場合、見聞のみで学習が成立するという（ ④観察学習 ）の現象がある。バンデューラは他者が賞罰を受けることを観察しただけでも学習が成立することを示した。このような他者が受ける賞罰を見る過程を代理強化という。

ピアジェによる認知発達理論

手持ちの（ ⑤スキーマ ）で同化できない場合は自分の（ ⑤スキーマ ）を変更することによって均衡化を回復しようとする（ ⑥調節 ）と呼ぶ。

最初の認知的段階である（ ⑦感覚運動期 ）は目で見ることのできる活動（知覚刺激と身体運動の協応）に基礎を置く。

自己中心的な直観的思考から抜け出すことはできないが、象徴機能や言語が発達する時期である。不十分ながら保存の概念が形成されこの時期を（ ⑧前操作期 ）という。

与えられた事象に対して自分の考えを協調させ体系化させる能力を獲得する時期でおよそ 7 歳から 11 歳頃までの時期を（ ⑨具体的操作期 ）と呼ぶ。

11,12 歳以降（ ⑩形式的操作期 ）の特徴は課題に含まれる事象について可能な限りの組み合わせを考え、関連のないものをはずしていくということができるようになる

比較行動学と発達

人間も含め様々な動物の行動についての生物学的比較研究領域を（ ⑪比較行動学 ）（エソロジー）と呼ぶ。